死にたるものに
その死にたるものを
葬らせよ

——マタイ伝8－22

反戦連合才2情宣部
6.7発行

アピール

我々に潮騒の如く還ってくる「闘い」の消息は、今吐息に満ちているだろう。擬いの闘志達は何処にでも居るとはいえ、結局我々も被害の一員でしかなかったのでは……という深い悔いを打ち消す能力を果たして我々は持っているだろうか。〈二度目所長劇……〉闘いは取り返しのつかぬものだ。我々は二月以来の我々の軌跡を、自己にも他者にも繰りかえさせてはならぬし許してもならぬのだ。

展望も確信も、そして現在さえも定かでない多くの友へ、我々は今深く呼びかける。我々の闘いに勝ちも負けもないのなら、又そういうものとして永続的な闘いに賭けたのだったら、今この〈昼化した早稲田〉でこそ我々は問われねばならない。我々の思想を、我々の姿勢を、我々の行動を。我々は〈消耗〉も〈召還〉も〈転向〉も、そんな言葉の全てが我々の辞書にはない筈だ！ と断言して我々の現実を強引にひっぱり出そうではないか、何処へ？ 我々の公然たる白日の中へ！ 我々の徹底的な伝播の場へ。これが不可能かどうかは、それ程問題ではない。今、それが〈闘い〉がくぐらねばならぬ絶対必然の過程だと念じるだけでよいのだ。現象としての〈運動〉に拘泥する事はいらぬが、一個の人間としての〈自己〉には徹底的に拘泥せよ！ つき合いがある人はもう我々の友ではない。さわやかな訣別の言葉を与えるだけだ。（鉄）

反戦連合オニ情宣部

おのれの言葉を捜せ

[redacted]

集団の誕生

己の意識と共通し合う何かを持っているとそれぞれ感じたヒトビトが、共通し合っていると感じたが故に、ある地点に集まる。共通の〈場〉を持つことによってそこに一つの集合体が出来上がる。それが集合体の状態である限り、そこで何を感じようが、何を語ろうが何をしようが、それは集合体の構成員それぞれの日常内における日常的な出来事でしかない。それ故、その集合体の構成員たちは、その集合体に方向性を与え、その方向によって己の日常をつき破る一つの原点としてその集合体に力を持たせようとする。そこに集合体はベクトルを持った存在としての集団へと変貌する。

「きのうもさ」という日常からの変身を企てんとする。

そこに於いてついに、早大反戦連合は現実として登場した。しかし、たった二ヵ月ほどで退場せねばならぬことになった。この退場に際し、〈消耗〉もしくは〈転身〉という形に於いて自己を位置させたところでそれは何ら反戦連合の構成員だった己と対峙したことにはならぬ。――過去のことをあだこうだと語ることはいらぬ。ただ必要なのは、問かれた現在である。〈消耗〉の円環運動も〈転身〉の線運動もくり返さぬためには、未来としての過去の検討――過去を過去たらしめないことである。

政治を否定した者の政治における敗北

自己という存在と関わりなく、外在的に存在するような形での政治というものを拒否するという姿勢を持って政治に関わろうとした。というよりむしろ、政治という存在を無化しようとする運動であった。それはまず何よりも、自己の存在こそが唯一に存在するということの確認であった。その地平に降り立ったとき、この者どもは何を手に入れたか。――「先手」である。例えば学校側が学館の予算権、管理運営権をやるといってもいらないという姿勢――それは取りも直さず、学館は何々権というものと関係なく自分達のものであ

るという認識である。それは同時に予算権、管理運営権というような似而非民主主義のルールの拒否でもある。また、学校側が大衆団交をやろうと言ったとしても、そんなことはやらないという姿勢――対話拒否の地平での行動。

「先手」を手に入れたことは、まさに革新的なことである。（それが当然であることは、当然すぎるほど当然なのであるが）――お役所が、何かの事件が発生して初めて善後策を講じるように、授業料の値上げとか、経理の問題とか、不当処分とか、何々法改悪とかの現象があって初めて可能な運動とは違うのである。過去これまでの闘争は、先行現象を必要とした。なぜそれが必要であったか。それは「大衆」を必要とした運動であるからだ。ところが、そういう運動はいつしかなし崩し的に崩壊することはこれまでの事実が証明している。それが必然的事実であると理解したならば、そこに何が残るか。頼れるものは全く自分だけであると感じた者どもの総反乱――孤立を求めて連帯を恐れず！

ところが現実の場で行動を開始し始めると、見事に政治に呑まれてしまった。なぜか――行動とはそもそも対話でもあるという側面を持つにも関わらず、対話拒否という己の立脚点を対話でもってしか示せない矛盾を生きぬけなかったのだ。その矛盾を生きぬくこと以外に解決の道はないにも関わらず。

卑俗な肉体による全存在の卑俗化

霞を食って生きてはゆけない。――観念だけでは闘争にならないのだ。どんなにすばらしいイマージュを持っていても、肉体がそれを行為＝表現できなければ、現実的には何の意味も持ち得ない。

バリケードが一つの風俗でしかない以上、バリケードは空間を占領したということ以外の何の意味も持ち得ない。当局がロックアウトし、それを簡単に再占拠したところで何の感動も楽しみもない。そもそも最初に本部を封鎖した時すら、あまりにもスイスイと出来

でしまう日常的なことでしかなかったのだ、大限小論堂、第二学館と拡大したところで内実のない空前が増えるだけでしかない。

やりたいという意志があってもイマージュが湧出してこない。イマージュがあっても肉体が行為しない。その屈辱をはね返そうとしても、現実的要請が先行してしまう。現実的要請に答えることが己の観念と逆立していることがわかりながらも、どうしようもなく現実に引ずられてしまう。それこそが本当の屈辱であるのだ。――屈辱に堪えることなく現実に負けてしまえばアトは簡単である。かつてやっていたことをやりさえすればいいのだから。

ここで二つの大きな誤謬を犯す。第一に「大衆」神話の復活、第二に反権力という姿勢が反革マルになってしまったこと。

ポツダム自治会粉砕、自治会民主主義否定と口にするからには「大衆」神話とは無縁な者になっていたはずだ。反戦連合にとって大衆とは反戦連合の諸個人のことであり、ここ以外のどこにも居はしない。残りの人間は全て敵である。そういう観点をしっかり押えていないのなら、唯一者として自己の存在を斗いに賭すなどと語ることはよやかしである。

そしてこ、己にすべてを盛り込もうとした時、当然引き出されて来た反権力という意識、それが、早稲田の特殊事情もあれ、いつの間にか反革マルという矮小なものになり下がってしまった。過渡的に革マルを潰さねばならないという情況があったにしろ、それが目的ではない。現権力に替わるべきものをこちら側が提示するという形で、必然的に組織を潰すということでなければならなかったにも関わらず、その作業が出来ず単なるアンチにしかなり得なかったのだ。

反戦連合破産の今後に残す問題

反戦連合がどのように崩壊したかを調べあげたところで意味はない。何かが欠けたまま一つの過程に入ってしまえば必ず崩壊するに決っている。それ故、それ

を反省して次にはそうしまいと決意したところで、そんなことは単なる気休めである。決意で解決できる問題ではないのだ。今、問われねばならぬのは何故破壊せねばならなかったかという問いである。――一言で言うならば、やるべきことをやらなかったからである。ただそれだけのことだ。現象的には五月の末破産したのであるが、実体的には、現実の場に登場したときすでに破産していたと言える。ではなぜ、やるべきことがやれなかったのか。ニーチェ風に弱さがそうさせたと言い切ってしまえばそれまでのことである。だが、それでは何ら解決にならない。事実としてわれわれは弱者でしかないのだから。なぜ弱くあったかが問題であり、それを検証したうえで、ならば、独りの弱者に可能なことは何かを捜さねばならぬ。

「やりたい」という意志がある。その意志が自然発生的に「やりたい」ことをやってしまう。とにかくある程度までは出来るのである。ところが、その先がないのだ。その行為が自然発生的なものであるが故に、何ら生そのものの次元における持続性を持たない行為にしかなり得ない。――破壊したいから破壊する。しかし、なぜ破壊したいのか。破壊という行為を理由付けると言っているのではない。「したい」という欲望が一体何であるのかを問うているのだ。本来欲望は検証出来ない故欲望と呼ばれる。何々の為とか、何々故という地平を通過してくるものではない。ここで問題にしているのは「したい」という形で現出したその欲望が己にとって何を意味しているのかということである。もしそれが発作的な欲望であるのなら、持続しないのは当然である。そうではなくて、己の生のとめえどころなき、何らかの呪縛を解き放とうとする欲望であるならば、それは単なる破壊ではなくなるのだ。

ところが、あまりにも自己を信じすぎてしまっていた。「したい」という欲望に従順すぎた。その行為をしっ放しなのだ。自己を信じてしまっているがために、その行為を持続する以外の道はないと思い込んでしま

う。猶もいけないことに、そこで現実的要請が生じ、それに引きずり込まれて、あとはズルズルベッタリ：

「したい」という欲望が全く非人間的なものであったらどうするのか。また、極めて矮小なものであったらどうするのか。――欲望を抑圧することは悪である。存在そのものに対する悪である。ところが、もしその欲望がナンセンスなものであると感知したらどうするか。それ以上の欲望を産出し、その欲望をアウフヘーベンしてしまうのだ。そういう形で自己の欲望を弁証法的に拡大再生産させていくことが本当の自己否定なのではないか。

自己の行為の無意味さを知りながらも、堂々とそれが無意味であると宣言出来ない。無意味な行為にこそ無意味な生活の無意味さがあるにも関わらず、己の生活を無意味なものとして捨てきれない醜さがある。

そしてカッコイイ言葉を吐いてその醜さを押し隠そうとする。「自己否定」と、――彼は「自己否定」という言葉をも否定せねばならぬのに、一つの表現として「自己否定」という言葉を使用してしまっている。彼が「自己否定」と語る時、それは最も醜悪な自己肯定の姿なのだ。

自然発生性に身を委ねた状態でいるにも関わらず、言葉を口にする。それは、己の自然発生状態を隠蔽する自己肯定の第一歩であるのだ。自然発生的な生の行動しか持たぬものに言葉はない。――そこで問き直ったところで所詮は問き直りである。反戦連合の破産は矮小な政治過程に負けたということではない。問き直りでは通用しないということである。

では何が必要なのか。自然発生性に身を委ねることではなく、そこから言葉を捜し出すのだ。そこに言葉が在るか無いかは知らぬ。なければ死ぬだけのことだ。しかし、捜さない限り向こうからやってくるということはあり得ないのだ。

集団について

集団の共同性を何に置くか。それを絶対存在としての観念に置く限り、もはや持続的な共同性を保ち得ないのではないか。武士道なく、天皇崇拝なく、ましてやカミチャマなく、やくざの義理人情なく、あるのは形骸化した観念のみである。もし疎外という言葉を使うならば、今日ほど疎外された情況はないであろう。しかし、出発点はここなのだ。

何が可能か。いや何をもって一つの集団を形成することが出来るのか。――その集団の構成員各人にとって親和力を持った一つの行為。そこに原点があるのではないか。一つの行為を通して情況と関わりを持つ。情況の中に拡散するのみではなく、常にそこにもどって来ることのできる本質的行為。――それには自分が一体何をやりたいのかの発見が必要である。自分自身に対し、何の躊躇もなく、これをやりたいというもの、己に己を暴露する。しかも、そのやりたいという欲望の意味するものが何であるかの検証こそが、今日ただいまの課題ではないか。それが出来ない限り、本能しか持ち合わせぬ動物と同じである。

という過程を踏まえない限り、その集団はいつしか敗りゆくものにしかなり得ないであろう。そのために、過渡的集団として、集団以前の集団を持ち、そこで各々の検証をすべきである。